

有島武郎研究

—「詩への逸脱」をめぐる(四)—

宮野光男

有島武郎著作集第四輯「叛逆者」(大7・4)には、エピグラフが掲げられていない。有島の死後、友人足助素一の手によって刊行された第六輯「ドモ又の死」(大12・11)にそれが無いのは当然のことであるが、有島自身の手で編集された一五冊の著作集のなかで、この輯だけにエピグラフがないのは、何とも奇妙なことである。第一、著作集という単位で、エピグラフとの関わりにおいて作品理解をしようとしている試みにとっては、はなはだ不都合なことである。

なまじ、一五分の一だけに、かえってこの輯だけにエピグラフがないことに、何が積極的な意味があるのではないかと感づてみたくもなるところであるが、今のところ、有島の、これに対する発言は見当らないようである。

単純に考えれば、付け忘れたということもあるのだろうが、そうであれば版を改めるときに補訂をすればよいのであって、再版以後にも手が増えられていないところを見ると、そうではなかったことになる。

かたちのうえから考えられることは、他の輯はすべて、中表紙と目次の間に挿入された前後二頁のスペースに、エピグラフと、著作集刊行の辞とが掲げられているのであるが、第四輯では、そのエピグラフの部分に、△この輯を白樺美術館に捧ぐ▽という献辞が記されているために、エピグラフがはみ出してしまったのではないかというところもある。

しかし、この理由とても、さして説得力のあるものではない。有島なき現在、事の真相は永遠の謎であるが、案外、有島にとっては、この輯が、名実ともに白樺美術館設立資金のために捧げられている(註)ということから、他の著作集とは異った存在として意識されていたものであったのかもわからない。

なにはともあれ、エピグラフが掲げられていないことは、有島の詩と詩論の考察を通して、「詩への逸脱」の解釈と、「瞳なき眼」の鑑賞を試みようとするくわだての過程として、各著作集に掲げられているホイットマン詩によるエピグラフと、各輯に収録されている作品との内的関係を考察することによって、各作品の主題追究のひとつの手がかりを得ることができるのではないかという仮

説を設定して追究してきたことが、第四輯に関しては適用できないということになり、今度の考察からは一応除外されなければならぬということになるのである。

ところで、実は、この輯には、有島の初期のホイットマン論のひとつ、「草の葉―(ホキットマンに関する考察)」〔大2・7〕が他の二篇の評論と共に収録され、しかも、その中で、著作集第十一輯「惜みなく愛は奪ふ」〔大9・6〕のエピグラフの一部として採用されている、「私はあるのまゝに存在する」〔「自己を敬ふ」の第二〇歌〕に対する積極的な解釈がなされており、おまけに、この論文にはホイットマン詩によるエピグラフまで付いているのであって、ひとまず著作集という枠をはずしても、有島とホイットマンとの関係を、ひいては、作品の主題をエピグラフとの関わりにおいて考察するという限定した方法論の可能性を内包しているのである。

そこで、以下、「草の葉」における魂論を中心にして、ホイットマン詩によって触発された有島の間人観を考察し、あわせて、その愛の論理である八奪ふ愛^{註2}論の形成過程の解明の、ひとつの手がかりを見出してみたいと思う。

二

「草の葉―(ホキットマンに関する考察)」が、すぐれた魂論であり、それが、ホイットマンによって八沸きこぼれた▽〔「想片」大11・5〕有島の内面の可能性の追究のあとであることは、すでに述べてきたところであるが、有島によって容認され、さらには、あら

まほしき姿として思い定められた魂の本質が、△古い造語を新しい器に盛つた▽〔足助素一宛書簡、大2・10・28〕云い方をするならば、△莊嚴▽であると同時に△糜爛▽した、△醜悪な▽ものであるが、それを、△真だ。規矩だ、進化する実在だ、神そのものだ――私は憚る所なく大胆に私の魂を神と呼ぼう▽と宣言しているところに、その特色を見ることができるのである。

もち論、有島が、このところで持ち出して来た神が、意識的には離れて久しいキリスト教の神ではないことは云うまでもないことであろう。△キリスト教の神を失った武郎は、ホイットマンによって彼自身の魂を獲た。それは彼にとつては、「人もし全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益かあらん。人その生命の代に何を与へんや」というキリストの言葉の中にある「生命」にも等しいものと思はれたことは疑いない▽^{註3}という指摘は、たしかに、有島のいう魂の一面をよく言い当てているように思われるのである。

△底から底を打ちぬいて、打ちぬけないところまで、自分の力が能ふ限りにまで進んで行くのだ。そこに私の魂がある▽という、あるいは、△假相を剝いで剝いで魂にまで行かう▽という魂は、△窮極的自我▽ともいふべき有島の内面の原質であり、有島にとつては、それは、神と呼ばねばならぬくらい絶対的なものだったのである。そして、魂それ自体が、調和し、満ち足りたものであり、△唯それ自身のみが魂の眞の伴侶である。△The Soul of itselfである▽という魂の絶対性の主張は、霊肉、善悪、美醜という分裂を調和し統一する原理として、△生きとし生けるもの、美しさ完全さよ！／又地球とその上の微細なもの、完全さよ！／善と呼ばれるものも完全だが、

悪と呼ばれるものも亦等しく完全だ。√〔「To think of Time」有島訳〕という、存在するものの全面的な肯定の原理として、有島に期待されていたことを明らかに示しているのである。

このような魂論は、すでに見て来たように、^(註5)「或る女のグリーンプス」〔明44・1〜大2・3〕の田鶴子、「サムソンとデリラ」〔大4・9〕のサムソンやデリラ、あるいは「洪水の前」〔大5・1〕のヤペテなどに見られる自律的人間像の理論的背景であり、著作集第四輯「叛逆者」に収録されている、他の二つの評論のうちの「叛逆者」(ロダンに関する考察)〔明43・11〕にみられる、八醜の美化―醜と美に対する標準の改造√の論理と、本質的に等質のものなのである。

三

ところで、有島は、自らの主張する魂の絶対性の根拠を、換言すれば、ホイットマンの謳う魂の絶対性の根拠を、どこに見出していたのであろう。

おそらく、この間は、すでに見て来た人間イエスの絶対性、換言すれば、自律的人間像の存立根拠を問うことと等質のものである^(註6)が、その答の、ひとつの可能性を、「草の葉」論のエピグラフに見ることができるのである。

……おゝ優しい草の葉。冬枯れもお前を凍え死にさせる事はしま
い。

毎年お前は萌え出て来る―隠れ退いたその所からお前はまた芽を

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐる―

ふくだらう。

行きずりにどれだけの人がお前を見つけ出して、そのかすかな匂ひを嗅ぎわけけるか、心細い―けれども全くないとは云へまい。

おゝたわやかな草の葉よ。私の血の華よ。お前の胸にをさめた思ひどほりを、お前なりに云つて見る……〔“Scented Heritage of My Breast”、“カラマス”第二歌の一部、有島訳〕

この詩が、魂論をその内容とする「草の葉」論のエピグラフであるということは、ホイットマン詩に歌われている草が、魂と密接な関係にあるからである。

ホイットマン詩に歌われている草のイメージ、それは、神なのである。

一人のをさな子が草を手一抔持つて来て、「これは何んだ」とい

った、
私が如何してそののをさな子に答へることが出来よう？ をさな子が知らないと同様に、私も知つてはならないのだから。

思ふにそれは、繁りゆく草葉で織りなされた、私の性情を現はす旗印だらうか。

或は思ふにそれは神のハンカチなのだ、
香ひ高き記念の贈物として、わざと神の手から落されたのだ、

〔以下略〕〔「自己を歌ふ」第六歌、有島訳〕

もち論、それは、永遠性、不滅性の象徴としての神であり、△超絶主義的宇宙哲学の立場から見ての究極者であり、宇宙に遍在する魂の一部としての自己の魂^(註7)でもある。

さらに、その神である草のイメージは、

長く長く草は茂りきたり、

長く長く雨は降りつづけ、

長く地球は回転をやめず。〔「博覧会の歌」第一歌〕

今ふたたび死を知らぬ草が、いともひそやかに柔くみどりの姿で今ふたたび血のように赤いばらが咲き。

〔中略〕

おお丘陵の朝を色どる紫よ、わたしが歌いおさめぬうちに、君をおお死を知らぬ草よ、君を。〔洋々たるポトマック川の岸辺で〕

と、永遠性、不滅性を加えて展開されてゆくのであるが、ホイットマンは、この草の永遠性に彼自身の詩の永遠性、不滅性への願いをこめて、△わが胸の香り高い草よ、／さまざまな歌草をぼくは君から摘みとって、ぼくは書く、のちの世の人びとに心をこめて読まれんがため△と歌っているのである。有島は、この後に続く部分をエピソードとして掲げることによって、ホイットマン詩の永遠性を願うと同時に、わが魂の永遠性と不滅性を願い求める気持を託したの

にちがいない。つまり、「草の葉」論の末尾の引用詩、

私は私の身を塵に委する、而して私の愛する草に現はれよう。

君が私を求めたいとなら、君の靴の下に私を尋ね給へ。〔以下略〕

〔「自己を歌ふ」第五二歌、有島訳〕

は、△ワルト・ホヰットマンは私の魂の告げる所にかく昌和する△というように、ホイットマンが永遠不滅であるように、有島もまたそうであることを冀望していることを表わしているということができるのである。

四

有島の魂論における△莊嚴△と△醜惡△との同時的存在の可能性すなわち魂の絶対性の根柢が、草の永遠不滅性にあるということは△草はホイットマンの抱く汎神論的な觀念を象徴しているのであって、それは普遍の生命であり、そこには真の死滅がない。このような意義をもつものと見れば、たとえ卑小であってもその存在の神秘なことは、「一片の草の葉も星辰の運行に劣るものではないと私は信ずる：〔英文略〕」のであって、およそ自然に存在するものであって、尊厳でないものはない△といわれているように、有島の「草の葉」論で展開されている魂論が、有島の初期の段階における肯定的自然觀の延長上に位置づけることができるものだとすることになるのである。

すでに見て来たように、有島の自然が、その初期の段階において△神を見るための一種の覗き窓のようなもの△であり、△自然に接

する詩眼Vとは、△真に神に接するV(日記、明32・4・6)ため
の△心眼V(同、3・16)でもあった。そして、有島にとつて、
△imaginationの翼に乗じて天外の聖境に遊ぶ詩人の快意V(同、
明32・10・1)への強い憧憬を、△自然によりて其 perfectnessを
示しつつある一神(同、明33・12・31)発見の願いに力点のおかれ
た、いわゆる信仰者としての生活を志向していたのであるが、もし
有島の魂論が、肯定的自然観の延長上に位置づけられるようなもの
であるとするならば、いまなお、この時に及んで、有島の精神構造
のなかに、神を求める要素が、超越的なもの、あるいは神秘的なも
のを求めるというかたちで、継承されていたということができるの
ではないだろうか。

先に、有島の自己絶対化を意味する魂論を、その一面としたのも
実は、有島の魂論が、もうひとつの面を、すなわち、自己の存在を
越えた、有島の表現をもってすれば△imaginationVによって感知
すべき世界にある魂の存在を思わせるものをもっていただけではない
かと思われるからである。

有島に、神と呼ばれている△荘嚴Vにして△醜惡Vなる魂、すな
わち△大きな美しいものVは、△暗示Vによってのみ現はされるVも
のであり、△この暗示の味を噛みしめ得る程に本能の働く人Vが、
本来的な意味で魂を実感できるのだというのが、「草の葉」論の主
張であるが、この文脈は、先の△imaginationの翼に乗じて天外の
聖境に遊ぶ詩人Vに通じるものなのである。

思うに、ホイットマンも、△暗示Vを重んじた詩人である。△ア
メリカの詩人がとるべき表現は、精神の世界を歌う新しいものでな

ければならぬ。間接的に暗示する方法をとるべきで、直接的な、描
写的な、叙事的な方法などは避けねばならないVとは、もちろん詩
論に関する発言ではあるが、△魂と無縁な詩はただの一篇も、いや
ほんの一言だって作るまいV(「ポーランクをあとにして」第十二
歌)と決心したホイットマンにとつて、△暗示Vは、魂の象徴のひ
とつ手段であり、有島の方法論は、ホイットマンの考え方と、そ
の本質において響きあっているということができるのである。

△暗示V、それは、それ自身としては直接に姿を現わすことのな
い超越的な、神秘的な存在を、象徴的に表現する方法であり、有島
が、魂の存在を、暗示によってのみ知ることができるとしたのも、
魂の超越的次元の存在性を表現するための方法だったのである。

かつて、神として認識されていた超越的存在が、有島の内面にあ
つて、ときに△自然Vであり、△運命Vであったことについては、
すでに述べてきたところであるが、^(詳述)もつとも自覚的な魂論にも、そ
の傾向がみられるのは、先に述べた有島の精神構造の特色と表裏を
なすものであり、有島の神秘主義的傾向は、思いのほか根強いもの
だったように思われるのである。

五

「草の葉」論に引用されているホイットマン詩の大部分のものは
「ホイットマン詩集」(大10・11、12・2)に収録されているが、
そのなかの「自己を歌ふ」の第二〇歌の後半の部分、△私はありの

まゝに存在する―それで沢山だVは、著作集第十一輯「惜みなく愛は奪ふ」〔大9・6〕の、二つの詩からなるエビグラフィの後半の部分であり、「草の葉」論における有島の、この詩に対する発言や位置づけを通して、有島の思想的遍歴のひとつの頂点ともいふべき「惜みなく愛は奪ふ」に展開されているA奪ふ愛Vの論理解明のための、有力な手がかりを得ることができるのである。

すでに三章、四章において述べてきたように、「草の葉」論は、草に象徴される永遠性、不滅性に支えられた魂であると同時に、A暗示Vによって知ることのできる、超越的次元の存在性をも内包した魂を求めてなされた魂論でもあるが、A私は不滅である事を知つてゐる。／〔中略〕／私は自分の荘嚴を知つてゐるVというホイットマンの、強烈な自己肯定に鼓吹されながら、有島もまた、A私はありのまゝに存在する―それで沢山だVということのできる、充足した自己を発見することを願う気持を、この詩に託したのであらう。

私はいのまゝに存在する―それで沢山だ。

誰も私に頓着しないからといって―私は平気だ。又誰も彼も頓着

するからといって―私は平気だ。

そんなものより遙かに大きな一つの世界が私に注意してゐる―そ

れは私自身だ。

而して私は今日自己を表現しようとも、千万年を待たねばならぬ

とも、

私はいづれにも等しく満足してゐるだらう〔「自己を歌ふ」第二

○歌、有島訳

自足する人間としての存在を願う有島の思いには、「草の葉」発刊当時のホイットマンに与えられたA誤解と迫害V、A黙殺と罵言Vにもかかわらず、A未来の勝利を明かに見得る超人の如くに価値ある者の何時かは世を征服すべきを信じて疑はぬ楽天使Vにして、A平気で最後まで初一念を翻へず事をしないV〔「ワルト・ホイットマンの一断面」大2・6〕信念の人ホイットマンの生き方のなかに、自らの理想を見ようとする願いもこめられていたにちがいない。そして、ホイットマンが、そのような不遇に耐えることが出来たのも、自己の不滅性と、自らの魂の荘嚴さとを、A神Vと呼ぶことのできるほどの確信に満ちていたからにちがいないという、ホイットマン讚美の思いが、有島自身の魂に関わる願望として、この詩に託されているように思われるのである。

このような魂論の文脈のなかに位置づけられているA私はありのまゝに存在する―それで沢山だVという詩句が、「惜みなく愛は奪ふ」のエビグラフィのひとつとして掲げられているということは、この著作集の中心課題であるA奪ふ愛Vの論理が、前述のような魂論を前提としなければ成り立たないことを表わしているということができるのである。

*

「草の葉」論にみられる、有島の魂への傾倒ぶりは、大正三年七月に発表された〔全集初出〕「内部生活の現象」に、発展的に継承されている。

これから私と申しますものは私の内部であります。個性とか、自己とか、良心とか、靈魂とか、色々に呼ばれて居るやうですが、私はそれ等に附帯した不純な意味があるのを嫌ひますから、仮りに私はそれを魂と呼びます。

こう云つて、わざわざ魂をクローズ・アップしてみせた有島の意図は、文中明らかなように、有島の内面性を、もっとも正確に表現することばが△魂▽であると同時に、それが超越的存在をも意味する可能性をもつたものであることを、従来の、ある限定された表現で肩代りすることなく、純粹に表現したかったからであろう。そのような概念規定に続いて、

私は魂だ。私はお前の魂だ。私は肉を離れた一つ概念の幽霊ではない、又靈を離れた一つの肉の働きでもない。お前の外部と内部との互に融け合つた一つの全体の上にお前が存在を有して居るやうに、私も又全体の中できびしく働く力のしめくゝりだ。

というところからも、そのことは明らかである。△力のしめくゝり▽とは、自己自身であると同時に、自己を離れた存在、存在外存在としての、△力▽の根源としての実在の謂だからである。

このような魂論のなかで、有島が愛を説くときに、人間の愛が、

お前は思ふ存分与へる喜びと思ふ存分受けるよろこびとの如何な

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる一

るものであるかを経験するであらう。

という、△与へる愛▽の論理のなかに位置づけられているのは、注目すべきことである。なぜならば、これが、神の愛の本質としては神は与へる力ではない奪ふ力だ。神は其の力のある分配を私に授け与へるのではない、其の力の全体の中に私を撰取しようとするのだ。〔「惜しみなく愛は奪ふ」大6・6〕

と、△奪ふ愛▽として説かれており、全く対立的な様相を呈しているからである。

このところで、有島が何故、神の愛を△奪ふ愛▽としたかについては、たんに意識的な反キリスト教的発想ということだけではなく詳らかに考えてみなければならぬところであるが、有島の愛の論理のなかに、このような対立があつたことは事実であつて、いささか興味深いところなのである。

有島の愛の論理が、与える愛を説くところには、ホイットマンの影響を、というか、あるいは、等質性を見ることができるのである。

地球は与えることをけつして控ず、気前のいいこと天下無類〔中略〕

愛は愛する人のためにあつて、ほとんどそっくり愛する人に戻り〔以下略〕〔「回転する地球の歌」〕

かびろく振り動く肘を持つた大地よ、豊潤な林檎の花咲く大地

よ！

ほく笑め、今こそお前の愛人が来るのだから。

惜しみなく、お前は私に愛を与へた、それ故私も亦お前に愛を与へる。

お、言葉にあまるこの熱狂した愛を！「自己」を歌ふ「第二歌、有島訳」

おそらく、このホイットマンの愛の論理の延長上に、「惜みなく愛は奪ふ」の、もうひとつのエピグラフ、「時たま私の愛するものに対して」「有島訳」があると思われるのであるが、この問題については後考に譲ることにして、とにかく、有島が、愛の本質を、あえて、反キリスト教的発想をもつてすれば、奪うものだとしなければならなかったにもかかわらず、それが、人間の愛ではなく、神の愛だとしなければならなかったところに、愛の絶対性に対する、ひとつの表現を見ることが出来るのかもわからない。いずれにせよ、教会退会後の有島にとって、神は、意識的には、 \wedge かすかな私「魂」の幻影 \vee 「内部生活の現象」であり、その意味では、 \wedge 私は神の愛と私のそれを異質なものと考へる事は出来ない \vee 「惜みなく愛は奪ふ」大6・6」と考へたのは当然のことである。それにもかかわらず、人間の愛と神の愛との間に、先にみたような対立が存在していたと考へられるのは、どう考へてみても奇異なことである。これが「内部生活の現象」から「惜しみなく愛は奪ふ」への発展過程における変化ということで説明しきれないことは、

更に残された問題は、私の心の中に烈しく働く愛なる力が大きな神秘的な力から分化されたものであるか如何かといふ事である。私はまだこの謎を開くべき鍵を確に握つてゐない。「同前」

と、逡巡せざるをえなかった有島であることからも明らかなのである。

ところで、大正九年六月に刊行された著作集第十一輯に収録されている完稿「惜みなく愛は奪ふ」では、人間の愛と神の愛との間にあった矛盾対立は、みごとに解消されているのである。

愛の表現は惜みなく与へるだらう。然し愛の本体は惜みなく奪ふものだ。「中略」与へると見るのは、愛者被愛者に直接の交渉のない第三者が、愛するものゝ愛の表現を極めて外面的に観察した時の結論に過ぎないのを知るだらう。

このところには、すでに、 \wedge 私はまだこの謎を開くべき鍵を確かに握つてゐない \vee という逡巡はみられない。いわば、神人合一の極致、神の愛の成就の凱歌が、たからかに謳われているところなのである。

では、有島は、いかにして、対立概念である、与える愛と奪う愛との一致を可能にしたのであろう。

それは、魂論の、個性、もしくは本能論への変化のなかに、その答を見出すことができるのである。

私の個性は私に告げてかう云ふ。

私はお前だ。私はお前の精髓だ。私は肉を離れた一つの概念の幽霊ではない。「惜みなく愛は奪ふ」大9・6

この個性論が、先に引用した「内部生活の現象」(大3・7)の△魂▽を、△個性▽に云い換えたものであることは、いうまでもないことである。そして、有島にとつては、個性の、△外界の刺激によらず自己必然の衝動によって自分の生活を開始する▽生活、すなわち△内発的▽生活を△本能的▽生活△という意味で、△魂▽が、△本能▽と云い換えることのできる概念でもあることを知ることができるのである。

有島が、個性といい、本能というところに、かつて、魂によって表わされていた二面性のうちの、より人間的な側面―肉に即した実体としての―が強調された表現であることを、たとえば、△人間によつて切り取られた本能―それを人は一般に愛と呼ばないだらうか▽というような、内発的な真実志向性においてとらえることのできる、人間の愛そのものとしての規定のなかに見ることができるのであるが、しかし、有島のいう△本能▽には、神の愛の本質である奪う愛に感応する機能として位置づけられる可能性のあることを忘れてはならないのである。

暗示こそは人に与へられた子等の中、最も優れた娘の一人だ。―私は私自身を言ひ表はず為めに彼女に優しい助力を乞はう。私は

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐって 四―

自分の生長が彼女の柔らかな胸の中に抱かれることによつて成就したのを経験してゐるから。併し人間そのもの、向上がどれ程彼女―人間の不断の無視にかゝわらず―によつて運ばれたかを知つてゐるから。「惜みなく愛は奪ふ」大9・6

有島の、超越的なもの、神秘的なものを認識する方法としての△暗示▽への依存意識は、依然として強いことを示しているのである(註15)が、かつて、△暗示の味を噛みしめ得る程に本能の働く人は幸だ▽「草の葉」―という思いのなかにこめられていた△本能▽へのもうひとつの期待、すなわち、暗示されたものを感応する能力としての本能であることへの期待が、このところに継承されているように思われるのである。先にも述べたように、有島のいう愛は△奪ふ▽といつてよいほどに絶対的なものと考へられている。それは、ただちに、神の、と称することができるといふほどに絶対的なものである。その愛を感応する能力としての本能は、あくまでも人間の内面における可能性であるが、有島が△本能△とは大自然の持つてゐる意志を指すものと考へることが出来る▽といふときに、それは、あるときには△運命▽を、またあるときには△神秘的な力―地上の存在をかく導き来つた大きな力▽を表わすものであり、そのような超越的な、神秘的な力、あるいは存在に感応しおえた本能は、すでに魂の一面である超越的、神秘的存在性をおびてゐるといつてもよいものに、質的变化をとげているといつてもよいのではないだらうか。もち論、このことは「惜みなく愛は奪ふ」における愛の論理が、多分に汎神論的であることを、たとへば△The little bird is myself.

and I live a bird.」などに、自然と人間との融合の論理を見ることのできるころなどが、その一例であるが、前提としたものであり、 \wedge 「惜みなく愛は奪ふ」に見られる武郎の思想は、神秘主義にいちじるしく接近し \vee ていたという論の成立する所以でもあるが、その力を自らの内に認める時が、まさに人間の本能が本能として働いているときであることもまた事実なのである。このような状況を、有島は、 \wedge 内部の分裂の統一され \vee 「草の葉」 \vee た、 \wedge よりよき調和の状態 \vee 「内部生活の現象」大9・1」というのであり、そうであるときに、はじめて、 \wedge 私はありのまゝに存在する——それで沢山だ \vee ということができるのである。

六

私は新しい芸術の傾向を魂に行く傾向と云はう。

「草の葉」における魂論の結論で、有島はこう予言している。そして、 \wedge 人生に相関はる芸術家 \vee 、 \wedge 魂に浸滲し——魂にまで行かうとする敬虔な向上 \vee を目ざす者のひとつの先駆的な存在として、 \wedge 後期印象派と概称される画家 \vee をあげていることは、以後の有島の傾向を知るためにも興味深い発言である。先にふれた、ロダン論における \wedge 醜の美化——醜と美とに対する標準の改造 \vee も、「ミレー礼讃」において、ミレーの基本的芸術観を支えているものが、 \wedge 私の魂を通して人と自然とを眺めてみたい \vee という視点を得て発見された \wedge 人間と自然との有機的な融合——「魂の逆」 \vee であるとい

う指摘も、その文脈において捉らえられた理想的人間像—— \wedge 叛逆者 \vee の条件を示しているのである。

*
 \wedge 魂 \vee の象徴としての詩、人間の \wedge 魂は直接に人類に対して自己を表現せんと悶えてゐる、かくて彼は彼自身の詩に於いて象徴する \vee とは、「詩への逸脱」(大12・4)における有島の、根源的な願望の表明であるが、 \wedge 私も長い間この懐がれを持ってゐた \vee という有島にとつて、これは、 \wedge 魂に行く傾向 \vee を実現する芸術形態が詩であることを発見した喜びの表明であり、 \wedge 詩への逸脱 \vee は、有島の魂論の、換言すれば詩論の、理論篇における結章としての位置づけをすることができるものなのである。

その意味では有島の詩論は、魂から魂へ、という軌跡を描いて展開されたものだということができる。そして、それは自らの魂の発見の過程であると同時に、超越的な魂追究の過程でもあったのである。秋田雨雀は、追悼文のなかで、

彼は彼の死の前に「死」を求めなければならぬあらゆる要素を彼の生活の中に同化してゐたに相違ない。ちやうど植物の葉がその葉の中に色々な要素を同化してゐるやうに、そこから彼は「生」を容赦なく踏みこむその不可思議な生命を「得てゐたのに相違ない。」「人間苦闘史の一頁」、「婦人公論」大12・8」

と述べているが、これも、先に指摘したように、 \wedge 詩への逸脱 \vee が、たんなる \wedge 死への逸脱 \vee ではなく、本質的には新しい可能性

を求めてなされた八詩への憧憬Vの文脈において捉えることのできるものであることを暗示しているのであり、すぐれた有島理解のひとつなのである。

しかし、そうであればあるほど、このところで、ふたたび、それにもかかわらず、なぜ、八逸脱Vという否定的な表現にしなければならなかったのかを問わなければならぬのである。

おそらく、雨雀が、有島の詩「死を」をひきながら、求めるべき魂が八生を容赦なく踏みこじるその不可思議な生命Vとしなければならなかったことも、そのひとつの答えなのであろう。ホイットマン詩との関わりを通して、死の想念を考察する意味もまた、ここにあるということにもなるのである。

〔註〕

- 1 白樺美術館については、「美術館をつくる計画について」(「白樺」大6・10)に記されているが、有島がこの計画に対して積極的であったのは、八新潮社が他の書物全部を割り上げをし又はするといふのなら、僕の書物だけ其儘にして置く法はないと思ふからさうして貰ひたいものだと思ふ。白樺美術館に這入る「叛逆者」の印税だけでも少しはよくなる筈だからなV(足助素一宛書簡、大8・9・16)というところからも明らかである。
- 2 「教会退会後の自然観をめぐって」(一)
- 3・14 小泉一郎「有島武郎とホイットマン」(「神と人とのあいだ」昭50・2 笠間書院刊所収)

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐって(四) —

- 4・16 亀井俊介「有島武郎とホイットマン」(「近代文学におけるホイットマンの運命」昭45・3 研究社刊所収)
- 5 「「或る女」論(一)」、「「サムソンとデリラ」、「大洪水の前」論」
- 6 ①「「聖餐」論」、②「有島武郎研究—「詩への逸脱」をめぐって(三)」(「梅光女学院大学日本文学研究」第一三号 昭52・11)
- 7 清水春雄「海のイメジ」(「ホイットマンの心象研究」昭43・11 篠崎書林刊所収)
- 8 清水春雄「草のイメジ」(「同前」)
- 9 「自然観にみられるキリスト教受容と定着の考察」
- 10・15 「有島武郎研究—「詩への逸脱」をめぐって(一)」(「梅光女学院大学日本文学研究」第一一号 昭50・11)
- 11 「「草の葉」初版序」(「杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之訳「草の葉」上 昭44・5 岩波書店刊所収」)
- 12 「運命観の考察」
- 13 有島の、この傾向について、山田昭夫氏の、「惜みなく愛は奪ふ」補註二〇(「日本近代文学大系」第三十三巻「有島武郎集」昭45・3 角川書店刊所収)において、八エマーソンやメーテルリンクの表現方法に類似している。岩野泡鳴の「神秘的半獣主義」(明39・6)も同様な表現方法に拠った独自の生命主義的芸術論であるが、ともにエマーソンに私淑した点に類縁関係が認められるVという指摘がある。このことは、有島の神秘的主義的傾向の解明のひとつの手がかりを示したものである。

付記

註2、5、6―①、9、12の各論は、拙著『有島武郎の文字
』〔昭49・6 桜楓社刊〕所収論文である。

なお、文中のホイットマン詩の訳文については、とくに有
島訳とことわったもの以外は、註11に掲げた、岩波文庫版ホ
イットマン詩集『草の葉』によった。